

## 「地域史」の構築をめぐる

中尾正己

従来の、いわゆる地方史研究における抜き難い欠陥は、早くから叫ばれていたように、それが中央集権的な傾向を脱却しえない所にある。全国的な視野なり、問題点を踏まえて地域の研究に向うことは、当然望ましいことであるが、全国的な一般史的問題の地方における検証という意味合いが、とかく優先する。

加えて、これは比較的言われていないが、学界に属する多くの研究者は、その専攻とする時代の領域——中世とか近世とか——を固持するのが通例であり、従って地方史の研究におもむく場合も、それぞれの時代の学史的な問題点を地域の場合において見る、そしてそれに終始する、ということに一般的にはならざるをえない。すなわち、それぞれの地域の通時代的な独自の展開、いわゆる縦の流れという視点が欠け落ちてしまう。

地方史の研究が隆盛に向ってすでに久しいが、これら研究における中央偏重の弊は、容易には克服されえない。

一方、「なんでも屋」と蔑称される、いわゆる郷土史家には、これら学界の研究者にはない、いくつかの特性がある。彼等は自分達の郷土の歴史を、時代別に横に輪切りをするようなことはしない。むしろ、縦の流れを通しての、自分達の郷土の独自性の顕彰に努めすぎると評される程である。

更には、歴史の場に生きる者としての、歴史に対する主体的な生の営みが彼等にはある。いわゆる「通りすがり」の地方史研究者とはこの点において峻別される。しかし、彼等郷土史家は、一方では、全国的な展望、方法論の厳密を欠きやすく、我田引水の弊に陥ることもまま見受けられる。

最近では、これら地方史または郷土史に代って、「地域史」という名称が、一般に用いられつつある。従来の地方史に見受けられた中央偏重の弊を改め、地域の独自性、生活者的感覚に根ざすことの提唱が、ここには含まれている。

私自身も、当初は、仏教史に対する関心から、地域におけるその検証をきっかけに、地方史の分野に足を踏み入れたことを告白しなければならぬ。現在は、それとは異った観点から、地域史の構築に取り組んでいるが、一つの例として北総地域を取り上げて見よう。

ここには、利根川、印旛沼、手賀沼など、いわゆる利根水系独自の「水」の問題がある。水運史、水利史、水害史など、さまざまな水をめぐるテーマがそこには展開しているが、いずれも十分な研究の進展を見ていない。特に水害史に関してはそれが甚しく、いわゆる江戸幕府による利根川の東遷、幕府の治水体制、近代における治水の進展など、一般史的なテーマに関しては、近年かなりの研究の蓄積が見られるものの、現今提唱されている地域史構築という観点からすれば、頗る貧困であるとの感を免れない。

水害の頻発が各村落の存立にどのような影響を与えたか、農民達の生活の実情はどうであったか、水害は領主の支配形態にどのように作用したか、等々。これらの問題は例えば幕府の治水政策

そのものから直ちに導き出されえない、在地性に富み、同じ北総地域にあっても、各村落の立地条件等により相異なる。それら各村落の独自の展開のさまを、一般史的な視野と展望の中において追うことに、地域史研究における一つの重要な課題がある。地域史研究における大きな難点は、古代・中世における史料の欠如である。今後の発掘に若干期待がかけられるとしても、根本的には中央の史料に頼らざるをえない。地域史の研究はいきおい、主たる対象が近世史、近現代史に向けられるのが一般の趨勢である。

近現代史も、各地域がその独自性を漸次喪失して行く過程とみなし、地域史研究の意義を否定する向きもあろう。しかし、全国的な均一性が進行する過程の中で、却って地域の独自性が問われ、あるいは浮き彫りにされるといふ例は決して少くない。水をめぐるとの具体的な例を上げて見よう。

利根川沿いのある村落は、水害激甚の地として知られていた。利根川の河原に面して簡単な囲い堤(輪中)がめぐらされていたが、利根川が少し増水しただけですぐ切れてしまう。近代の大洪水である明治四十三年八月の大水の時には、台風が来る前に堤は切れてしまった。千葉県でも、堤防の決壊は一番早かった程である。

この村では、堤の決壊は日常茶飯事であったので、耕地の全滅も珍しいことではなかった。そこで人々は、川が増水してくると耕地はあきらめ、逆に囲い堤を切って水を引き入れた。すなわち囲いは生け洲に早変わりし、人々は思いのままに魚を取った。「水が出るとお金が入る」といわれ、洪水でも生活は十分に成り立つたのである。

しかし、明治後期になって、ようやく国営の近代利根改修工事

が始められ、この村落にも河原に堂々たる近代堤防が築かれた。利根川の洪水が直接この村落を襲うことはなくなった。しかし、これでこの村の水害が絶ったわけでは決してなく、土地がもともと低いだけに、堤内に落水が氾濫するいわゆる内水被害が頻発するようになった。しかも利根の洪水とは違って雨水であるから魚は出ない。皮肉にも近代の利根川改修の結果、この村はかえってさびれてしまったのである。

このような特殊な例は、利根川治水史全体からすれば取るに足らないものであるかも知れない。しかし治水には必ず犠牲を伴うという事実、なによりも、ここにはまぎれもなく一つの地域の独自の歴史がある。在地に密着してその独自の問題性を捉え、やがてその問題の意味を全国史の中で問うという地域史本来の立場の中で、これらの村落の歴史もよみがえることであろう。

現今の地域史研究の最大の課題として、広汎な大衆との協力の問題が上げられる。柳田国男の郷土研究に示されているような市井雑事への顧慮なくしては本来の地域史研究はありえない。それぞれの地域における生の営みの主体たる個々人の生活者の感覚こそ、地域史研究の原点でなければならない。

各地で市町村史の研究、調査が盛んに行われているが、かつての地方史研究の内包する欠陥がそのまま表われている向きも少くない。地域の広汎な大衆の参加と研究者との連携によってこれらの欠陥は克服されるだろう。そうした例も決して稀ではない。本学卒業生・学生諸師も、将来にかけての一つの課題として心に留めておいて欲しいと思う。

(なかお まさき・兼任・日本文化史)